

原 著

若者における一人称の使用の様相とその機能的意味

The aspects of usage of first person pronouns and these functional meanings in young people

大和田智文

要約：本研究では、個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の様相と、それぞれの一人称にこめられた機能的意味を見出すための検討を行った。大学生 44 名を対象に質問紙調査と面接調査を実施した。一連の調査の結果、一人称の使用の様相については、「オレ単一使用型」、「オレ・ジブン併用型」、「オレ多用型」、「ボク多用型」、「ワタシ単一使用型」、「アタシ単一使用型」、「ワタシ・アタシ併用型」および「ウチ使用型」の計 8 パターンが見出された。また、一人称にこめられた機能的意味については、KJ 法によって上記 8 パターンごとに特徴ある差異が見出された。本研究における結果は、若者に特有の行動を若者カテゴリへの同化や社会的アイデンティティの確立と関連づけながら理解していくための可能性を提供するものであった。

Key Words：若者、一人称、機能的意味、若者カテゴリ

わが国において、若者の振舞い方や態度、行動、対人関係のあり方に関する多様化や変化が報告されるようになって久しい (e.g., 速水・木野・高木, 2004; 大和田, 2006, 2007; 白井, 2006; 湯川, 2002)。たとえば大和田 (2006, 2007) によると、今の若者に特有とみられるような振舞い方や態度、行動には、「ことば使いの悪さ」、「敬語不使用、目上に対する非礼」、「若者ことば」、「流行に敏感・おしゃれ」、「地べた座り」、「すぐキレる」、「電車内での携帯等迷惑行為」、「大声で話す・騒ぐ」などがあると報告されている。若者は、なにゆえに彼らに特有とみられるような振舞い方や態度、行動 (以下、「若者特有の行動」と記載) をとるのであろうか。

これまで大和田 (2006, 2007, 2009 (未公開)) は、こうした若者特有の行動が、生育環境や性格といった若者に固有の個人的特性によって表出される場合ばかりではなく、いわば「若者という社会的カテゴリ」(すなわち「若者カテゴリ」) へと同化¹⁾を進めていくことによる「若者らしさ」の表現や、若者カテゴリの中におけるアイデンティティの確立・維持によってもたらさ

れている可能性があるのではないか、という視点 (e.g., Billig & Tajfel, 1973; Hogg, 1992, 2006; Hogg & Abrams, 1990; Tajfel, 1970; Turner, 1987) により検討を行ってきた。

この視点によると、人は自分自身のカテゴリと他のカテゴリとの比較において、カテゴリ間の差異性を最大とすることによって自身のカテゴリの評価的な有利性を得ようと努めるものであるという。自身にとっての社会的カテゴリが肯定的なものであれば、そこから肯定的な自己概念の形成や評価がもたらされるため、人はカテゴリ間の比較を自身のカテゴリに有利になるような方法で行おうと努める。対人間・集団間行動の基となる過程は、他のカテゴリとの間の差異性の最大化と、当該カテゴリ内の差異性の最小化を伴う、自身に関するカテゴリ化と社会的比較であるとされる。このように、人はあるカテゴリの特徴に従って自身をカテゴリ化 (すなわち自己カテゴリ化) し、カテゴリ内の差異性が最小化されることにより当該カテゴリのプロトタイプと一致した行動をとるようになる (Hogg, 1992, 2006; Turner, 1987)。言い換えれば、対人間・集団間行動が生起するための必要十分条件とは、人があるカテゴリの成員として自己カテゴリ化をすることであるといえる (Billig & Tajfel,

1973 ; Hogg, 1992). そして, 上記のようなカテゴリ間の差異性を伴った自己カテゴリ化を通じて, 肯定的な自己評価や自己高揚がもたらされる. この肯定的な自己評価や自己高揚によって, 肯定的な社会的アイデンティティの確立へと向かおうとすることは, 人の備える基本的動機の反映でもあるという (Hogg, 1992 ; Hogg & Abrams, 1990).

冒頭に述べた若者特有の行動をこの自己カテゴリ化に関する理論に照らしてみると, 次のような理論枠組みを仮定することが可能であろう. すなわち, ①若者が, 若者とは知覚しないようなカテゴリとの比較を通し, 自らを若者カテゴリに位置づけていく過程が存在する. ②この過程は, 言い換えれば, 若者がいわば「非若者カテゴリ」では用いられないことがないような彼らに独自の行動をとることにより, 彼らの所属するカテゴリと他のカテゴリとの間にある差異性を最大化させ, また同時に所属するカテゴリ成員間の差異性を最小化させながら彼らに特有のカテゴリへの同化 (すなわち, 「若者らしさ」の表現の獲得) を高めていく過程である. ③そして, 異なったカテゴリ間の差異性を最大化することによる自己高揚を通し, 若者は肯定的な社会的アイデンティティの確立へと導かれるのではないかと予測できる (すなわち, この枠組みを簡潔に記せば, 「若者はある行動をとることによる若者カテゴリへの同化を通して若者らしくなる」ということになる).

上記の枠組みは, 「若者」を, 個人の発達上のある特定の段階 (青年期など) における固有の心理機制によって説明しようとするものではなく, 社会的比較の基盤となる社会的カテゴリのひとつとして捉えようとするものである. この枠組みでは, たとえば, 若者とそれ以外の人びと一般との間にみえるような行動上の特徴を, 発達段階 (青年期, 成人期など) によって異なる複数の心理機制 (e.g., Erikson, 1959) で説明せずとも, 社会的カテゴリという概念のみを用いることによって理解が可能となる. すなわちこの概念を用いれば, 若者特有の行動を「非若者」側から理解することが可能となるだけではなく, 発達段階を越えての相互理解を促すことも可能となるのである. よって以下においては, なぜ若者は若者特有といわれるような行動をとるのかという問に対する解を得ようとする際, 上記概念を用いた既述の枠組みに従って検討を進めていくこととする.

この枠組みに従って若者特有の行動を理解しようとするとき, 若者特有の行動をどのような指標によって捉え

るのが適切と考えられるだろうか.

この点について, たとえば大和田 (2006, 2007) では, 若者特有の行動として「ことば使いの悪さ」, 「敬語不使用, 目上に対する非礼」, 「若者ことば」, 「大声で話す・騒ぐ」など, 主にことばの使用に関するものが多く報告されていた. また, こうしたことばの使用に関する行動のイメージと, 「私的な価値観」や「性格・能力」といった若者のアイデンティティの中でもより自己の中核に近いと考えられる部分との関連性も示唆されていた. さらに, 上に示した行動は, 他の行動と比べより多くの若者と行動的に一致するものでもあった. このことにより, 対人場面におけることばの使用や選択が, 若者らしさの表現として彼ら自身にとって重要視されているのではないかと考えられる.

それでは, 対人場面でのことばの使用や選択に際して, 若者も含む人びと一般は, 自分らしさ (本研究でいう若者であれば若者らしさ) をいかなる種のことばによって適切に表現し得るものであると考えられるだろうか.

この点に関し, たとえば Cooley (1902) は, 自己すなわち自分らしさとは, “I”, “my”, “me”, “mine”, “myself” といった一人称単数の代名詞によって指し示されるものであるとした.

日本語における一人称代名詞 (以下, 「一人称」と記載) に着目しても, そこにはいくつもの言い回しが存在し, 人びとはそれらをその場の状況に応じて自在に使い分けていることは周知の通りである. 榎本 (1998) によると, 「私」, 「僕」, 「俺」, 「お父さん」, 「おじさん」など, 日本語における一人称のさまざまな使い分けは, 単なることばだけの問題ではなく, その都度自分らしさが変化することを意味するものであるという. このことを鈴木 (1973) は, 「「自分は何物であるのか」ということが, 「相手は誰か」に依存する構造で, 「相手の立場からの自己規定, 他者を介しての自己同一性の確立」」 (三輪, 2000, p.65 参照) であるとしている.

Cooley (1902) や James (1892), Kihlstrom & Cantor (1984) は, 自己の他者や社会との不可分性を強調し, これを社会的自己とよんでいる. 既述の榎本 (1998) や鈴木 (1973) の指摘は, Cooley (1902) などの述べるような自己の社会的次元²⁾ に応じた変容可能性を一人称の変容を通して示したものであるため, ここから人びとの一人称の使い方と, Hogg (2006) などのいう社会的アイデンティティのあり方との不可分性を想定することができる.

以上より、若者も含む人びと一般の、一人称の使用による社会的次元に応じた自分らしさの表現を仮定することができるものと考えられる。

すなわち、ここまでの議論によって、既述の枠組みに従って若者特有の行動を理解しようとする際、その行動指標として一人称の使用を用いることが適切であると仮定できるため、本研究ではこれを若者特有の行動の指標として扱うこととする。

既述の枠組みによると、若者は若者特有の行動をとることにより、彼らに特有のカテゴリへと同化をし、肯定的な社会的アイデンティティの確立へと導かれるのであった。したがって、この枠組みによって若者特有の行動を理解しようとするためには、若者特有の行動が若者カテゴリへの同化（すなわち、「若者らしさ」の表現の獲得）や社会的アイデンティティの確立へと向かう上でどのような機能を持つものであるのかをまず確認していく必要がある。

そこで本研究においては、若者のある社会的次元における一人称の使用（ここでは、「一人称の使用の様相」とよぶ）と、この一人称の使用の様相にみる一人称の機能（意味づけ）についての検討が必要となる。すなわち本研究では、若者特有の行動を理解していくために、個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の様相と、そこにみる各一人称にこめられた機能的意味について探索的に検討することを目的とする。そのことによって、個々の若者の一人称の使用の様相には、若者カテゴリへの同化に対して異なった影響を及ぼすほど機能的意味の違いがみられるものであるかを明確にし、冒頭に示したような若者特有の行動の生起について理解を深めていくこととする。

なお、本研究では、一人称の使用の様相にみる一人称への意味づけの違いは、若者カテゴリへの同化に対して異なった影響を及ぼすものであると想定しているため、この一人称への意味づけはまた、個々の若者をそれぞれに異なった若者カテゴリへの同化へと方向づけていくための機能を有するものであると考えられる。それゆえに本研究では、一人称の使用の様相にみる一人称への「意味づけ」のことを「機能的意味」として捉えることとする。

方 法

本研究では、個々の若者における社会的次元を若者の位置する社会的な集団と同義に捉える。その上でまず、個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の

様相を見出していくために、「『学生生活を送る中で必要不可欠と想定される（社会的な）集団』×『日頃主に用いる一人称』マトリックスに基づく一人称の使用状況』に関する複数の回答パターンを得、これを上記一人称の使用の様相として扱うこととする。その際、各一人称の操作に関する妥当性を確認しておく必要が生じる。この問題の解決のために、各一人称間に存在するイメージの相違が個々において了解されているかを確認することとする。具体的には、以下に示すような手順で検討する。

参加協力者

問題部において述べた通り、本研究では「若者」を社会的カテゴリのひとつとして捉えることを前提とする。したがって、本研究における調査対象は、社会的カテゴリのひとつである若者カテゴリを適切に代表するような対象である必要がある。たとえば、大学生、短大生、専門学校生などは、わが国における社会的階層からみてもここでいう若者カテゴリに分類することが可能であると考えられる（大和田，2007）。そこで本研究では、神奈川県内の私立大学学部生（心理学専攻1年次生）44名を対象に、質問紙調査および面接を実施することとした。授業時間を利用し、質問紙調査および面接からなる一連のセッションへの参加協力を募り、最終的に男性19名、女性25名より協力を得ることができた。参加協力者（以下、「参加者」と記載）は、個別あるいは2名から4名の集団にてセッションに参加した。参加者の平均年齢は19.32歳（18歳から24歳まで、 $SD = 1.59$ ）であった。

セッションの流れ

はじめに、質問紙への回答を求め、次いで回答された内容の一部につき面接を行った。1セッションに要した時間は、およそ45分から1時間であった。

質問紙構成

「集団×一人称マトリックス」に基づく一人称の使用状況（質問1）

まず、個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の様相を「『集団×一人称マトリックス』に基づく一人称の使用状況』に関する回答パターンより導くため、以下のような質問を用いた。

2005年12月に行った予備調査結果に基づいた、学生生活を送る中で必要不可欠と想定される9個の社会的次元（以下、方法部および結果部においては「集団」と記載）群（「所属ゼミのメンバー」、「所属ボランティア団体のメンバー」、「所属サークル・県人会等のメンバー」、「同じクラスや同じ授業のメンバー」、「遊びや食事など

をともにする仲間」,「高校・中学時代からの仲間, 地元の仲間」,「バイト先・実習先のメンバー」,「趣味の仲間」および「家族」と, 大和田・下斗米 (2006) において示された, 若者が日頃主に用いる8個の一人称群 (「ワタシ」,「アタシ」,「ウチ」,「オレ」,「ジブン」,「ボク」,「自分の名前等」および「その他」) の2軸を用いてマトリックス表を作成し, 各集団において参加者自身が日頃使用する一人称について尋ねた。その際, 該当する箇所には全て丸印を記入するよう求めた。

各一人称における一般的イメージの相違 (質問2)

次に, 質問1における各一人称の操作に関する妥当性を確認するために, 各一人称それぞれに存在する一般的イメージが個々において了解され, その一般的イメージが各一人称において異なっているかを, 以下のような質問を用いて確認した。

質問1で提示された「その他」を除く7種の一人称それぞれに対する一般的イメージについて, 10個の形容詞対 (「私的な-公的な」,「子どもっぽい-大人っぽい」,「粗野な-礼儀正しい」,「荒っぽい-丁寧な」,「うちとけた-よそよそしい」,「上品な-下品な」,「くだけた-あらたまった」,「まじめな-いいかげんな」,「カッコいい-カッコ悪い」および「主張の激しい-穏やかな」) を用いて, それぞれの形容詞対の尺度上にて7段階で評定させた (右側の形容詞にもっとも近い評定値が「7」であった。) この形容詞対に用いた形容詞群は, 2006年4月に実施した予備調査を経て選定されていた。

人口統計学的変数

年齢, 性別, 所属, 現在の居住地および出身地について尋ねた。

面接内容

個々における一人称にこめられた機能的意味を明らかにするために, 質問1で回答された結果をもとに半構造化された面接を実施した。面接における主な質問事項は, 丸印が付された集団および一人称について, 何ゆえに当該箇所に丸印が付される必要があったのか, 個々におけるその積極的な理由を尋ねるものであった。たとえば, 当該一人称についてどのようなイメージを持っているのか, 同じ一人称であっても集団に応じてその意味に変化は生じるものであるのか, 当該一人称を他の一人称によって代替することは可能であるのか, 一人称の使用にこれまで変遷が生じたりはしたか, などの質問を行った。その際, 半構造化された状況であっても回答された内容そのものをできる限り尊重したため, 本面接は比較

的緩やかな構造を持ったものであったといえる。本面接における会話内容は, ICレコーダーに録音された。

一人称にこめられた機能的意味の分析

面接時に録音された会話内容から, 一人称にこめられた機能的意味の特徴を分析した。その際, 質問1より見出された, 個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の様相を示すパターンごとに, KJ法を用いて行った。この一人称の使用の様相を示すパターンの抽出結果については, 結果部において詳細を述べる。

KJ法の具体的な分析方法に関しては川喜田 (1967) に従った。まず, 面接において各パターンに該当する全参加者が発言した, 「ひとまとまりの構造をもった意味内容のエッセンス」 (川喜田, 1967, p.69) をすべて抜き出し, それをひとつずつ1枚のカードに記録した。次に, そのカードに記載されたエッセンスの意味的内容が近いと思われるもの同士を集め, それらを小グループとしてまとめ, 小グループごとに適当な小タイトルをつけた。

次に, 小グループの意味的内容が近いと思われるもの同士を集め, それらを中グループとしてまとめ, 中グループごとに適当な中タイトルをつけた。したがって, 各パターンごとの機能的意味はこの複数の中グループより構成されることとなる。

次に, それぞれのパターンごとに, 上記で見出された中タイトルを論理的に整合するよう空間上に並び替え, 配置した。

以上の手続きにより, 面接で得た一人称にこめられた機能的意味をパターンごとに図示することができた。パターンごとに図示したものは, Figure 2からFigure 9として示した。

実施時期

2006年5月下旬から同7月中旬にかけて行った。

結果と考察

各一人称における一般的イメージの相違

質問2で得られた回答をもとに一人称間における各形容詞対の評定得点 (加算平均値) のズレをみることで, 各一人称における一般的イメージの相違を検討した。その際, 「上品な-下品な」と「まじめな-いいかげんな」の2形容詞対については逆転項目とした上で, 10形容詞対につきもっともネガティブな方向 (左方向) に評定がなされた場合に1点を, もっともポジティブな方向 (右方向) に評定がなされた場合に7点を与えることとした

(ただし、「カッコいいーカッコ悪い」については、もっともカッコいいと評定した場合に7点を与えた)。

形容詞対ごとに、一人称を要因(7水準)とする一元配置の分散分析を行った。その結果、どの形容詞対においても一人称の主効果が有意となった($ps < .001$)。多重比較の結果、各一人称には、部分的に5%水準ないし有意傾向にとどまったものの概ね0.1%ないし1%水準で有意差がみられたことから、一般的イメージの相違が認められた。この結果をFigure 1に示した。これは、各一人称における一般的イメージの相違を分かりやすく示すため、一人称ごとに各形容詞対の評定得点を折れ線で繋いだものである。各形容詞対における各一人称の評定得点をみた場合、上記の多重比較の結果に示したような有意な差がそれぞれに示されていたことから、個々において了解され得る各一人称における一般的イメージの相違を認めた。Figure 1に示された折れ線の形状からも明らかのように、もっとも一般的イメージの相違が小

さかった一人称は「アタシ」と「ウチ」であったが、この両者間にも「私的ー公的」尺度上に有意差が認められていた($p < .05$)。なお、各形容詞対の評定得点の数値についてはTable 1に示した。

個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の様相

質問1において提示されたマトリックス表につき、当該表に記入された丸印のパターンが2名の評定者によって分析された。その結果、男性については、「オレ単一使用型」、「オレ・ジブン併用型」、「オレ多用型」および「ボク多用型」の4パターンに、女性については、「ワタシ単一使用型」、「アタシ単一使用型」、「ワタシ・アタシ併用型」および「ウチ使用型」の4パターンに分類された。パターンの命名に際しては、各パターンの違いをうまく表現できるよう考慮した。各パターンにおける人数の内訳は、3名、6名、6名、4名(以上男性)、5名、5名、

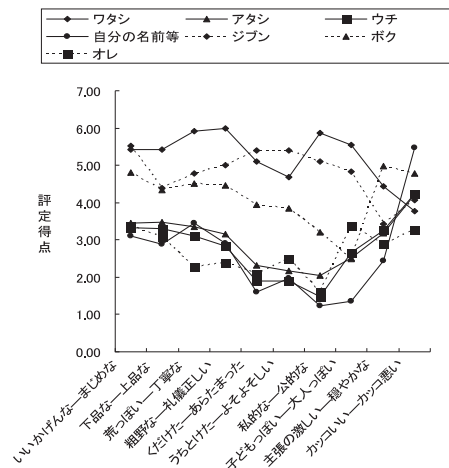


Figure 1 一人称別形容詞対評定得点 (n=44)

Table 1 一人称別形容詞対評定得点 (n=44)

項目\一人称	ワタシ (SD)	アタシ (SD)	ウチ (SD)	自分の名前等 (SD)	ジブン (SD)	ボク (SD)	オレ (SD)	F
いかげんなーまじめな	5.43 (1.10)	3.45 (0.89)	3.32 (0.90)	3.11 (0.80)	5.52 (1.22)	4.80 (1.18)	3.39 (0.80)	45.29
下品なー上品な	5.43 (1.14)	3.48 (0.99)	3.30 (0.92)	2.89 (0.76)	4.39 (1.13)	4.34 (0.85)	3.09 (0.76)	36.99
荒っぽいー丁寧な	5.91 (1.12)	3.34 (0.98)	3.11 (0.91)	3.45 (0.86)	4.79 (1.37)	4.52 (1.16)	2.27 (0.86)	56.15
粗野なー礼儀正しい	6.00 (1.17)	3.16 (0.80)	2.84 (1.02)	2.91 (0.96)	5.00 (1.15)	4.45 (1.23)	2.39 (0.96)	66.62
くだけたーあらたまった	5.11 (1.11)	2.32 (0.82)	1.91 (0.90)	1.61 (0.97)	5.41 (1.07)	3.95 (1.09)	2.09 (0.97)	109.58
うちとけたーよそよそしい	4.68 (1.08)	2.16 (0.88)	1.89 (1.03)	1.98 (1.03)	5.39 (1.25)	3.84 (1.19)	2.50 (1.03)	72.25
私的なー公的な	5.86 (1.12)	2.05 (0.77)	1.48 (0.81)	1.23 (0.88)	5.11 (1.43)	3.20 (1.77)	1.61 (0.88)	112.97
子どもっぽいー大人っぽい	5.55 (1.39)	2.52 (0.97)	2.66 (1.04)	1.36 (1.03)	4.84 (1.09)	2.48 (1.42)	3.39 (1.03)	72.51
主張の激しいー穏やかな	4.43 (1.14)	3.19 (0.87)	3.25 (1.09)	2.43 (1.07)	3.43 (1.40)	4.98 (1.29)	2.89 (1.07)	23.41
カッコいいーカッコ悪い	3.77 (0.60)	4.20 (0.62)	4.25 (1.13)	5.48 (0.81)	4.07 (0.75)	4.77 (1.02)	3.27 (0.81)	25.70

5名, 6名(以上女性)であった。本研究では, 上記の計8パターンを一人称の使用の様相として捉えることとする。なお, 女性については上記以外にもさらに2つのパターンが想定可能であったが, この2パターンに関しては多くのデータが得られなかったため(各パターン2名ずつ), 本研究においてはこれらを機能的意味に関する分析対象から除外することとした。

一人称にこめられた機能的意味

一人称にこめられた機能的意味の特徴を上に示したパターンごとに方法部に述べたような方法で分析(図示)し, そこから導かれた事柄を文章化し考察を加えると以下ようになった。

オレ単一使用型 このパターンに相当する者は, どのような場面であっても常に「オレ」で通すことが多いという特徴を持っている。「オレ」に対して「カッコいい」, 「男らしい」などの肯定的なイメージは持っているものの, それを用いることに必ずしも強いこだわりがあるということではなかった。「オレ」という表現がもっとも標準的なものであると捉えたり, 子ども時代からの使用による習慣的な表現であったりすることによる「オレ」の常用であった(ただし, かなり幼少時においては「ボク」の使用も認められた)。それゆえに, 場面を問わず「オレ」を用いることにあまり抵抗を感じてはいないが, 目上や初対面の人物に対してはやや抵抗を感じることもあるようであった。本パターンに相当する者は, 「ジブン」に対しても「謙虚である」, 「目上に対する敬意がある」などの肯定的なイメージを持っており, 目上や初対面の人物に対しては「オレ」の代わりに「ジブン」が用いられていた。しかし, 目上や初対面の人物であっても親密さが増してくると「オレ」を用いるようになっていた。また, 「ボク」に対しては肯定的・否定的の両イメージが報告された。本パターンでは, 「オレ」が自己の表現として相応しいと報告されたが, それは半ば習慣的な表現

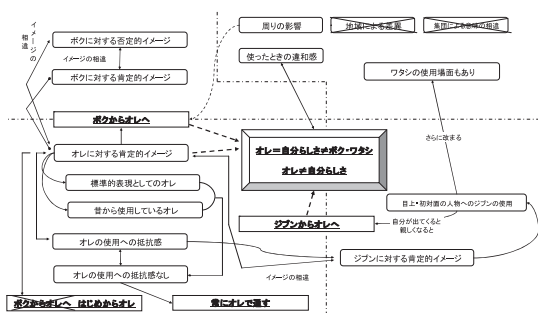


Figure 2 オレ単一使用型における機能的意味 (n=3)

でもあるためそれほど積極的に「オレ」が自分らしいと感じているわけではないようであった。

オレ・ジブン併用型 このパターンに相当する者は, 「オレ」に対して「カッコいい」, 「男らしい」, 「若さがある」, 「積極的」などの肯定的イメージを抱いているが, 目上や初対面の人物に対して「オレ」を用いることには抵抗を感じていることも多かった。そのような場合には, 「オレ」の代わりとして「ジブン」が用いられやすかった。「ジブン」に対しても「公的である」, 「礼儀正しい」などの肯定的なイメージは持っているが, この「ジブン」とは「オレ」の代用であり, これは相手との親密さが増すにつれやがて「オレ」に変化しうるものであった。また, 子ども時代においては「ボク」を多用しているものの, 性別を意識し始めたり, 周囲(先輩など)の用いる「オレ」に格好の良さを認めたりすることによって次第に「オレ」への移行が始まり, 現在に至っては「ボク」を子どもっぽく弱々しい表現であるとして強く忌避するようになる, という報告が多くみられた。本パターンは, 「オレ」が自己の表現として最適であることがかなり強調されたものであった。その一方で, 「ボク」への強い忌避感情も認められた。また, 「ジブン」は「オレ」の代替として一時的に用いられるものであるという傾向がみられた。したがって, 本パターンは「オレ」と「ジブン」を併用してはいるものの, 実際には「オレ」に対する思い入れのもっとも強いパターンであるように思われた。また, 本パターンの特徴は比較的明快なものであり, 本研究における男性参加者の典型的なパターンであった。

オレ多用型 このパターンに相当する者は, 基本的には「オレ」を用いるが, 場面に応じてさまざまな一人称を使い分けるという特徴がある。「オレ」の使用は, 「ストレートな感じ」, 「近さを感じる」, 「言いたいことがビシッと見える」などといった「オレ」に対する肯定的イメージに基づくが, 一方で, 「オレ」は上位者から下位者に

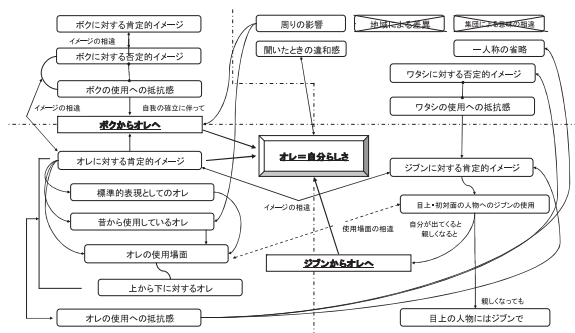


Figure 3 オレ・ジブン併用型における機能的意味 (n=6)

向けて物を言うというイメージも報告され、そのような場合は代わりに「ジブン」や「ボク」、「ワタシ」が用いられていた。特に相手が目上や初対面の人物である場合、「ボク」や「ワタシ」が用いられやすかった。また、子ども時代においては「ボク」を多用しているものの、性別を意識し始めたり、周囲（先輩など）の用いる「オレ」に格好の良さを認めたりすることによって次第に「オレ」への移行が始まっていた。この「ボク」を用いるか「オレ」を用いるかによって、自分自身へのイメージや他者からみられるイメージは全く異なってくるものであるとの認識がなされていた。本パターンでは、「オレ」が自己の表現として最適であると報告されていたため、「ボク」などの使用は、自分らしさの表現からかなり距離があり、自己呈示的な要素の強いものではないかと思われる。

ボク多用型 このパターンに相当する者は、複雑な様相を持っていた。まず「ボク」に対するイメージは、「オレよりも優しい」、「落ち着いた」といった比較的中立的なものであった。子ども時代に一人称を意識し始めると、「ボク」から「オレ」へと使用に変化が生じた。その背景には「大人っぽい」、「正直である」といった「オレ」に対する肯定的なイメージがあった。ただし、「オレ」には上位者から下位者に向けて物を言うというイメージがあり、「オレ」を使用することに強い抵抗感も生じていた。そのため、目上や初対面の人物に対して、また公的な場面においては「ボク」や「ワタシ」、「ジブン」が使用されていた。また、高校時代などの思春期において一人称を意識し始めたような場合、これまで使用していた「オレ」をより大人っぽい「ボク」に変えたという報告もみられた。本パターンにおいては、日頃「ボク」を使用することがもっとも多いものの、実際にはさらに大人っぽいイメージである「ワタシ」や「ジブン」を常用したいという希求があるようであった。しかしその一方では、「オレ」を自然に用いることができるという上記とは相反する希求もみられた。概して、「オレ」が自己の表現として最適であれば良いという願望を秘めているようであったため、日常的な「ボク」の使用は自分らしさの表現から距離があるものではないかと思われる。

ワタシ単一使用型 このパターンに相当する者は、「ワタシ」に対しても「アタシ」に対しても同様にそれほど強くはない肯定的なイメージを持っていた（たとえば、「丁寧であたりさわりがいい」（「ワタシ」）、「プライベートで使えるが子どもっぽい」（「アタシ」））。しか

しそのイメージには、「ワタシ」は主に公的な場面において使用するもの、「アタシ」は主に私的な場面において使用するものと、比較的明確な差異も認められた。また、子ども時代から使用しているといった習慣的な要因によって「ワタシ」の使用場面が規定されているようであった。一方、子ども時代は「アタシ」や「ウチ」を使用していたという者は、「ワタシ」に対するやや肯定的なイメージや「くだけ過ぎている」、「子どもっぽい」といった「ウチ」に対する否定的イメージによって、「アタシ」や「ウチ」から「ワタシ」に使用が移行していることが認められた。また、現在「ワタシ」を常用している者も、家族の中に限って「自分の名前」を使用しているという報告もあった。家族以外で用いられる「ワタシ」

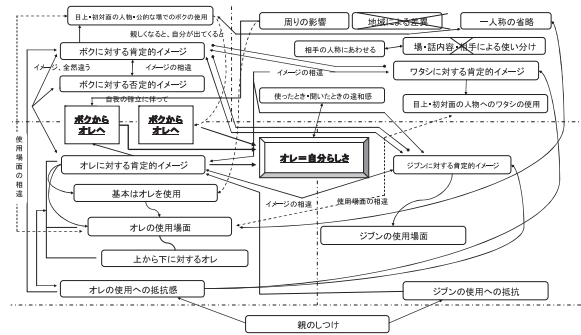


Figure 4 オレ多用型における機能的意味 (n=6)

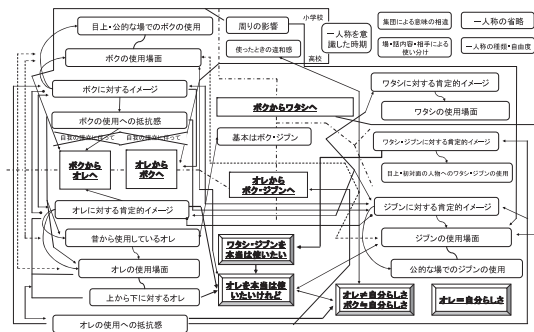


Figure 5 ボク多用型における機能的意味 (n=4)

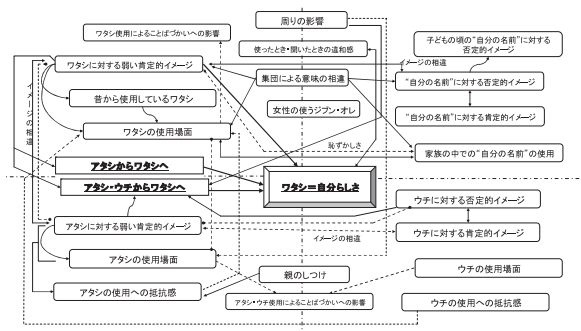


Figure 6 ワタシ単一使用型における機能的意味 (n=5)

と、家族の中で用いられる「自分の名前」とは、同義的なものである。本パターンでは、「ワタシ」を用いることに強いこだわりがあるわけではないが、「ワタシ」が自己の表現として相応しいと感じているようであった。

アタシ単一使用型 このパターンに相当する者は、「ワタシ」および「アタシ」に対するイメージが肯定的でも否定的でもなく比較的中立的なものであった(たとえば、「アタシよりもかしこまっている」(「ワタシ」),「ワタシよりも気軽に使える」(「アタシ」))。しかしながらこの両者は、前者が公的な場面で使用するもの、後者が私的な場面で使用するものというように、イメージ的に比較的中立的な区別がなされていた。また、日頃「アタシ」を用いているが、目上や初体面の人物に対して、また公的な場面に限って「ワタシ」を用いるという明確な区別も認められた。さらに、家族の中に限って「自分の名前」を使用しているという報告もあった。本パターンでは、「アタシ」が自己の表現として最適であると報告された。したがって、自分らしさの表現としては「アタシ」の使用が基本となるが、自己呈示の場面に限っては「ワタシ」を用いるという、比較的中立的な特徴が見出された。

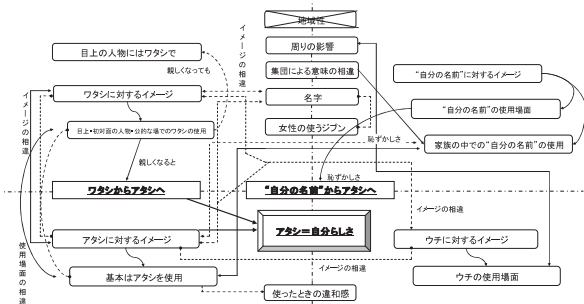


Figure 7 アタシ単一使用型における機能的意味 (n=5)

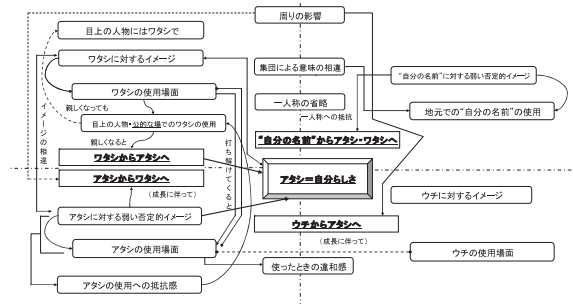


Figure 8 ワタシ・アタシ併用型における機能的意味 (n=5)

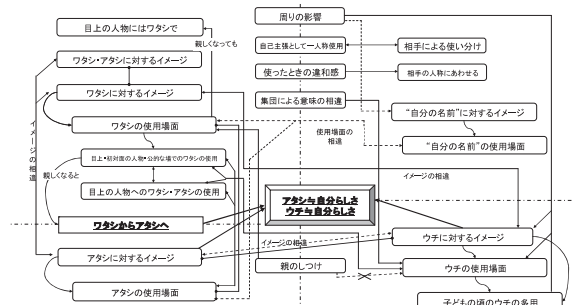


Figure 9 ウチ使用型における機能的意味 (n=6)

シ」を用いているが、目上や初体面の人物に対して、また公的な場面に限って「ワタシ」を用いるという明確な区別も認められた。さらに、家族の中に限って「自分の名前」を使用しているという報告もあった。本パターンでは、「アタシ」が自己の表現として最適であると報告された。したがって、自分らしさの表現としては「アタシ」の使用が基本となるが、自己呈示の場面に限っては「ワタシ」を用いるという、比較的中立的な特徴が見出された。

ワタシ・アタシ併用型 本パターンに相当する者は、「ワタシ」は主に公的な場面において使用するもの、「アタシ」は主に私的な場面において使用するものと、そのイメージを明確に区別していた。また「アタシ」に対しては「子どもっぽい」、「敬語には馴染まない」といった、やや否定的なイメージを持っていた。特に目上の人物に対して、また公的な場面において「アタシ」を使用することには抵抗を持っており、そのような場合には「ワタシ」を用いていた。ただし、相手との親密さが増すにつれこの「ワタシ」は「アタシ」に変化するという報告が多くみられた。一方で、成長過程においてこれまで使用してきた「アタシ」に子どもっぽさを感じ、より大人っぽい「ワタシ」に変えたという報告もみられた。また、高校・中学時代からの仲間、地元の仲間に限って「自分の名前」を使用しているという報告もあった。本パターンでは、「アタシ」をもっとも自分らしいと感じているようであった。しかし、「アタシ」に対しては上記の通りやや否定的なイメージも持っているため、これが自己の表現として最適であれば良いという願望を秘めたものとして捉えることも可能であろう。

ウチ使用型 このパターンに相当する者は、まず「アタシ」に対して多様なイメージ(たとえば「くだけた」や、その逆の「改まった」など)を持っていたことをあげられる。そして、「ウチ」に対するイメージは、この「アタシ」に対するイメージのうち比較的私的なもの(上記で言えば「くだけた」)に近いものであった。ここでも他のパターンと同様に、目上や初体面の人物に対して、また公的な場面においては「ワタシ」を用いるという報告が多くみられた。そして、相手との親密さが増すにつれこの「ワタシ」は「アタシ」に変化していくものであった。また、「ウチ」の使用に関しては、周囲の友人が「ウチ」を用いているから、子どもの頃から「ウチ」をよく用いていたから、などの理由によるものが多かった。また、話がノッて来たときの勢いや、相手の一人称に合わせて「ウチ」を用いるという報告もみられた。本パターンの

特徴として、「ウチ」を用いることが多い者は「ワタシ」や「アタシ」などの他の一人称も併せて用いることがほとんどであるということである。また、どの一人称に対しても特別な思い入れがあるということではなく、周囲の使用の影響を受けたり相手に合わせたりしながらその都度使用する一人称を変化させているようであった。また、本研究では「ウチ」の使用において出身地および居住地による差は見出されなかった。しかしこの点については、本研究における参加者が少数であったこともあるため、調査対象を増やして検討する必要もある。

結 論

本研究では、個々の若者における社会的次元に応じた一人称の使用の様相と、そこにみる各一人称にこめられた機能的意味についての探索的な検討を行ってきた。その結果、一人称の使用の様相については、「オレ単一使用型」、「オレ・ジブン併用型」、「オレ多用型」、「ボク多用型」（以上男性）、「ワタシ単一使用型」、「アタシ単一使用型」、「ワタシ・アタシ併用型」、「ウチ使用型」（以上女性）の計8パターンが見出された。また、一人称にこめられた機能的意味については、上記8パターンごとに特徴ある差異が見出された。

この機能的意味の社会的次元に応じた差異については、すべてのパターンにおいて確認できたわけではなかったが、相手に応じた使い分けや併用、周囲の使用の影響などがみられたことから、社会的相互作用が機能的意味の規定因となっていることは確認できたものと考えられる。

本研究では、個々の若者の一人称の使用の様相には、若者カテゴリへの同化に対して異なった影響を及ぼすほど機能的意味に違いがみられるものであるかを明確に示していくことが意図されていた。これに対して、上記8パターンごとにそれぞれ特徴のある機能的意味が見出されたことは、個々の若者の用いる一人称にこめられた機能的意味の違いが、若者カテゴリへの同化に対して異なった影響を及ぼす可能性を示し得るものであったといえる。よって本研究では、若者特有の行動の生起を、ある状況において顕著となっている社会的カテゴリ（すなわち若者カテゴリ）へと同化をしようとした結果として捉え得る可能性を示唆できたといえよう。

しかしながら本研究では、一人称の機能的意味の中の社会的次元に応じた差異を、全てのパターンを通じて明確に示すことができたわけではなかった。したがって、

本研究の結果からは、若者カテゴリの下位概念である各社会的次元に若者が自分自身を位置づけたことによる特有の反応であったか否かについては明らかになっていない。こうした点を踏まえた上で、さらにデータを追加するなどの工夫も加え、一人称にこめられた機能的意味が当該の社会的次元に依拠するものであることを明確に示せるような証拠を得ていく必要性が生じてこよう。そして、種々の若者特有の行動が、若者カテゴリへの同化や社会的アイデンティティの確立のためにより具体的にはどのような機能を持つものであるのか、一人称以外の行動指標を用いるなどさらに検討を進めていく必要がある。

注

- 1) 同化とは、あるカテゴリへの自己カテゴリ化によって、当該カテゴリの他成員との差異性の最小化がもたらされ、その結果、当該カテゴリにおける自他の態度や行動がともに類似してくる（当該カテゴリのプロトタイプ性を備えるようになる）現象であると定義する。本研究での若者カテゴリにおいては、若者が若者カテゴリのプロトタイプ性を備えるようになる、すなわち「若者らしさ」の表現を獲得するようになることであると捉えている。
- 2) 本研究では社会的次元を社会的カテゴリの下位概念として捉えている。言い換えると、若者の日常生活に必要な不可欠いくつかの社会的次元をひとつの領域に統合した場合、それが当該の社会的カテゴリ（すなわち、本研究においては若者カテゴリ）であると考えた。

付記

本研究は、日本パーソナリティ心理学会第15回大会にて発表された。また本研究は、専修大学大学院文学研究科心理学専攻平成20年度課程博士論文として提出されたものの一部に大幅な修正を行ったものである。本研究を進めるにあたり、専修大学文学部の下斗米淳教授より御指導を賜りましたことをここに記して深く感謝申し上げます。

引用文献

- Billig, M., & Tajfel, H. (1973). Social categorization and similarity in intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, *3*, 27-52.
- Cooley, C.H. (1902). *Human nature and the social order*. New Brunswick and London: Transaction Publishers.
- 榎本博明 (1998). 「自己」の心理学 ―自分探しへの誘い― サイエンス社

- Erikson, E.H. (1959). *Psychological issues: Identity and the life cycle*. International Universities Press.
- (小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **51**, 1-8.
- Hogg, M.A. (1992). *The social Psychology of group cohesiveness: From attraction to social identity*. Herts: Harvester Wheatsheaf.
- (廣田君美・藤澤等 (監訳) (1994). 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- Hogg, M.A. (2006). Self-conceptual uncertainty and the lure of belonging. In R.Brown & D.Capozza (Eds.), *Social identities*. Hove and New York: Psychology Press. pp.33-49.
- Hogg, M.A., & Abrams, D. (1990). Social motivation, self-esteem and social identity. In D.Abrams & M.A.Hogg (Eds.), *Social identity theory: Constructive and critical advances*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. pp.28-47.
- James, W. (1892). *Psychology, Briefer course*. New York: Henry Holt.
- (今田寛 (訳) (1992). 心理学 (上・下) 岩波文庫)
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中公新書
- Kihlstrom, J.F., & Cantor, N. (1984). Mental representations of the self. *Advances in Experimental Social Psychology*, **17**, 1-47.
- 三輪正 (2000). 人称詞と敬語 一言語倫理的考察 人文書院
- 大和田智文 (2006). 若者観察者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 専修総合科学研究, **14**, 201-228.
- 大和田智文 (2007). 若者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討 文研論集, **49**, 11-33.
- 大和田智文 (2009). 若者行動の理解に向けた枠組みに関する研究 —社会的アイデンティティ獲得過程における若者カテゴリへの同化の視点からの接近— 専修大学大学院文学研究科心理学専攻平成20年度課程博士論文 (未公開)
- 大和田智文・下斗米淳 (2006). 若者における一人称への意味づけに関する検討 (1) —社会的アイデンティティ確立のための社会的カテゴリーの選択をめぐる— 日本心理学会第70回大会発表論文集, 136.
- 白井利明 (2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴 —変容確認法の開発に関する研究 (Ⅲ)— 大阪教育大学紀要第IV部門, **54**(2), 151-171.
- 鈴木孝夫 (1973). ことばと文化 岩波新書
- Tajfel, H. (1970). Experiments in intergroup discrimination. *Scientific American*, **223**, 96-102.
- Turner, J.C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- 湯川進太郎 (2002). 自己存在感と攻撃性 —自己存在感の希薄さ尺度の信頼性と妥当性の検討— カウンセリング研究, **35**, 219-228.